時評　女鳥羽の岸辺から

短気や強制は逆効果―
学校の「自由」と「規律」

中信地区の某高校で、三月初めに行われた卒業式の際、「卒業生答辞」を読む予定だったA君が、急にB君に代えられた―という新聞報道があった。

答辞の内容が教師側の意向に合わないとして、事前に手直しされたため、不満を抱いたA君が答辞役を拒んだ―ということらしいが、この記事を読んだ私の脳裏には、もうふた昔も前、深志高校に社会科教師として在職していたころのことが、鮮やかによみがえった。

昭和四十五年（一九七〇）は、いわゆる「七〇年安保闘争」の年。その前後数年間は、全国の大学・高校で〝現状変革〟の気運が高揚した時期だったが、深志高校でも「伝統を見直そう」という声が高まり、その一つとして、三年生の間では、卒業式の変革が真剣に論議された。

当時生徒部長（注1）だった私は、三年生の有志諸君と話し合いながら〝新方式〟をまとめる仕事を担当したが、その結果――

▽卒業証書は、クラスごとに選ばれた代表が、壇上で校長から受けとる（壇上の校長が一段低い位置の「総代」に〝授与〟する形はやめる）▽「送辞」ではなく、新生徒会長による「在校生代表挨拶」とする▽「答辞」ではなく、前生徒会長による「卒業生代表挨拶」とし、壇上から全参列者に向かって所感を語る（巻紙または奉書紙に毛筆で書いたのを、〝弁慶の勧進帳〟みたいに読み上げる旧来の方式はヤメ。言いたいことを自由に言う）――ときまった。

高校卒業は（法律的には未成年者でも）精神的にはコドモと訣別してオトナの仲間入りすることを意味する。卒業式は同時にオトナ社会への〝加入礼〟でもあるのだから、それにふさわしい内容・形式であるのが当然―というのが、当時の深志高校教職員の一致した考えであった。

そして、「卒業生代表挨拶」は、オトナとして〝単独飛行〟にとび立つ決意を表明する、一種の独立宣言なのだ、他から口出しする余地はない―というのが、教師・生徒共通の認識であった。

――以来二十年、毎年の「卒業生代表挨拶」は、（時には教師・学校・世相に対する痛烈・適切な批判をも交じえながら）校長や来賓の話に優るとも劣らぬ堂々たる内容で、列席者に深い感銘を与え続けているようである。

◇

深志高校の生徒が大好きなコンパ（注2）の後片付けが余りにもだらしない―と、その管理に当たる厚生委員会（生徒の自治機関の一つ）の委員長・N君が憤慨、コンパ全面禁止を全生徒に通告したことがあった。

たちまち多数の生徒から「全面禁止は行き過ぎだ」「委員長横暴！」と非難の声が上がった。しかしN君は「みんながだらしなさを骨身にしみて反省しなきゃダメだ」と、いささかも動じなかった。

クラスの生徒に頼まれた担任教師が「オレが責任持つから許可してくれよ」と低姿勢で申し入れても、N君は「先生、例外を認めるわけにゃ、いかねんね」と、厳しい態度を崩さなかった。

こうして数カ月経過、頃合いよしと見たN君は、「コンパ解禁」を全生徒に通告した。それからのコンパが、以前とは見違えるほどの厳しい〝自己規制〟の下に運営されたことは、言うまでもない。

◇

生徒の「自由」と「規律」とを両立させるには―と、心ある教師は日夜頭を痛めているようだが、その際参考になるのは「鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス」の家康流であろう。

「殺してしまえ」（信長的短気）や「鳴かせてみよう」（秀吉的強制）では、校内はむしろ荒廃するばかりではないだろうか――外見はキチンとしていても。

（注1）　初代生徒部長の平林六弥さん（のち深志高校長、故人）は「生徒の自治による生徒会活動全般の相談相手が「生徒部」だ。いわゆる生活指導には全教員が当たるべきで、「生徒指導部」という特別の組織を作る必要はない」と考えていた。この考えを継承して、深志高校には今も「生徒指導部」はなく、「生徒部」が存在するだけである。

（注2）　クラス・部・郷友会（出身中学校別の組織）などが土曜日の夜、学校のコンパ室か教室を借り、それ用の炊事場で作ったカレーライスなどの夕食を共にし、歌い、騒ぎ、そして語り合う、旧制松本中学校以来の行事。

（上島　忠志）